

アクティングを通し、日本語学習者がどのように、ドラマ上の他者へ認知的共感を拡げたか
ーペルソナ・ライティングを使ってー

左治木敦子 (国際教養大学)

認知的共感 (Cognitive Empathy)とは、自分と異なる他者の視点へ意識的に自分の視点を移動させ、相手の考えを理解する能力である。Galloway(1984)、Bennett, Bennett and Allen (2003)などは、高レベルな異文化理解度の特徴として、その文化に Empathy (共感)を持つ、あるいはその文化当事者の視点を習得していると述べている。本研究では、他者の視点を得るために、その他者になって演じてみることにより、認知的共感が深められたかどうか。また深められたとすれば、どのような面で深められたのかを調査する。

データとして用いる、ペルソナ・ライティング (Pugh et al, 1997)は、クリティカル・シンキングの活動の1つである。ドラマやアニメを見せた後で、学習者に登場人物を一人選ばせ、その人物の視点で日記、手紙、あるいはモノログを書かせるという作文活動である。

調査対象は、日本に留学中の日本語中級話者とする。最初に彼らに、映画「桐島、部活やめるってよ」を見せる。次にその映画の中の登場人物を一人選ばせ、選んだ人物の視点をうい、日記、手紙あるいはモノログを書かせる。次に、自分自身がその登場人物となり、実際に体を使い、演じてみる。最後に、またペルソナ・ライティングを用い、日記、手紙、あるいはモノログを書かせる。最初と最後のペルソナ・ライティングの間には、学習者が演技に向かいやすいよう、登場人物のセリフを読み解くワークシートなどをする。

二つのペルソナ・ライティングを比較し、演じる前と後とでは学習者がその登場人物に対してどのように認知的共感を深めたか、あるいはどのような面で深められたかを調べる。

この活動を通し、学習者には以下のような利点があると推察される。1) 登場人物の感情を理解し、それを第二言語で表現することにより、普段自分では使わなかった語彙も学べる。2) 自分とは異なる人物を深く掘り下げることにより、新たな視点を習得する練習ができる。3) 異文化体験で自分にとっては理解不可能な事柄に遭遇した時、ターゲット文化側の視点へと自分の視点を移動し、解決を探る訓練になる。